

子どもたちと取り組んだ「東京花祭り」

1998年9月

東京花祭り実行委員会

はじめに

「教育の原点がここにある」「教育の鏡だ」と祭りに参加した教育関係者らが絶賛する愛知県奥三河地方に伝わる「花祭り」、その「花祭り」を私たちが東京で始めたのが5年前、「花祭り」に出会ったのが更にさかのぼって8年ほど前になる。そして昨年1997年12月に第5回「東京花祭り」を開催し、参加者及び内容で今までにない規模となった。子どもたちだけでなく大人まで祭りに心を引かれ、まさに家族で、そして地域で大人も子どもも楽しめるようになりつつある。

この5年間の花祭りの取り組みを、地域の大人たちによる子育てという側面（私たちは、花祭りではこの比重が相当大きいと考えている）でまとめた。まとめるにあたって「東京花祭り」にかかわってきた邦楽「花しょうぶ」、ダガスコ（北多摩民舞教育研究会）、そして「花の舞」父母会がそれぞれの関わりで次のような内容でまとめた。

なぜ花祭りに取り組むようになったのか

5年間の取り組みの概要

花祭りの地元での祭りの伝承

子どもたちと花の舞 教えてきたダガスコの立場で -

子どもたちと花の舞 親の立場で -

「東京花祭り」の夢

なぜ花祭りに取り組むようになったのか

「花祭り」との出会い

戦後、新しい憲法と教育基本法の下で、教師たちの自主的な教育運動が活発に行われるようになり、その中で、「学校体育教育研究同志会」も意義ある豊かな活動を繰り広げた。その「ダンス部会」で日本の民俗舞踊の研究・実践の必要性が位置づけられ、その専門的な研究集団として、1968年1月に「東京民族舞踊教育研究会」が発足した。（通称東京民舞研）この「民舞研」が「日本の子どもたちに、日本の踊りを！」という言葉を合い言葉に、学校の生徒たちとともに民舞教育を進めていった。学校での運動会や学芸会、クラブ活動などを中心とした創意的な実践が進められた。当初は、舞台芸能専門集団から教わりそれを実践していたが、やがてそれらの舞踊の原点を求めて、伝承している地元の祭りや保存会と交流し、教材研究の基礎として地元から直接教わるようになっていった。

その中で、愛知県奥三河地方の「花祭り」の研究も、1985年、現地の東栄町御園の保存会との交流から始まった。（1985年1月2日～4日花祭り見学）

研究の最初は、まず現地の実物をお祭りの現場で見ること・つまり見学から始まるのだが、東栄町御園と言う地に行くのが一苦労。こんな山中に人が住んでいるのかなと思われるほどのカーブばかりの山道を車でひとしきり上っていく。正月の2日の夕方から明るる日の昼頃まで舞踊を中心として夜を徹して行われる花祭りを、見学するのも体力がいる。いつしか雪が降り出して、しんと冷え込んでくる。くべてある薪がくすぶって煙が立ちこめ煙たい。老人の舞い・青年の舞い・払い清める市の舞い・大人の順の舞・山見鬼の舞いなどが続く。

午前0時頃になると「花の舞」と称する子どもたちの舞が始まる。このころになるとこの部落にこんなに人がいるのかと思うほど、何処からともなく見物衆が増えおせよおせよの超満員。舞庭の土間にも人々があふれていっぱい。あふれる人の中をくぐり抜けるように舞い手の子ども4人が登場し軽快な、太鼓のリズムに乗って舞い始める。人の波間の中をヒューイヒューイとまるで妖精のように跳び舞回る姿は、本当に見る者の心の画布に絵巻物を描いていくようだ。

子どもたちの4人の舞が4折あるが、最後に5・6才の子どもがお父さんの肩に担がれて登場してくるのが「舞上げ」である。子どもが神様として扱われているそ

の姿に感動せざるを得ない。これらの「花の舞」が「花祭り」の華であり、村の将来を輝かしいものと約束する舞でもある。舞い終わる頃には、午前1時を優に過ぎている。眠い目をこらえてけなげに舞う幼児を見ている人々のまなざしが何ともいえなく美しい。舞い手の子どもたちを励まし調子づけるためにこの「花の舞」の廻りでも見物衆はテホへのかけ声とともに舞い踊る。舞い手の清らしさが庭燎衆（^{せいと}周りで見たり踊ったりしている人々）にも乗り移っていくように一舞一舞、みんなが美しくなっていく。

「花の舞」の後も次から次へと一晩中舞が繰り広げられる。三つ舞い・榊鬼の舞い・ひのねぎ・翁の舞い・みそぬり・めしぬり・四つ舞・湯囃子の舞い・朝鬼の舞い等々……。

民舞研の交流

民舞研は、この年以來毎年のように、「花祭り」に出かけるようになった。そして保存会から直接に、「花祭り」の舞を教わることが出来るようになった。

現地では大人に「花の舞」を、しかも外部の人間に教えるなんて言うことは歴史上かつてなかったことだ。子ども用の早いリズムで踊りながら、早口の奥三河言葉で指摘される言葉が聞き取りづらく、まさに大人にとっては厳しい試練だった。

民舞研では、花祭りも含めて毎年数回現地に通い教わるようになっていった。その中で一緒に参加していた広木・人見夫妻が連れ歩いていた息子の穰君^{みのる}が、お祭りの現場で太鼓や笛の拍子に乗って夢中になって踊りまくっているのを、表屋さんのご主人（尾林克時さん）が見ていて、「あんなに踊り好きのなら、年末の『舞い習い』に一週間預けてくれれば舞えるように出来るから」と声をかけて下さり、それがきっかけで1987.12.25～30まで現地の「舞い習い」に参加し、明るる正月2日の「花祭り」本番で、「剣の舞い」を地元の子どもたちの中に加わって舞うことになった。穰君はすっかり地元の子どもになって舞っていた。（穰君はその時小学1年生）

御園地域は典型的な山村で過疎化が進み、子どもの数が減少して、御園小学校もあと1年で閉校になると言うときに、「この際、穰君を一年間御園に山村留学させてはどうか」と尾林さんから話があり、小学三年生の一年間を御園で生活することになった。（1989.5月～1990.3月）

「ダガスコ」の活動

一方、民舞研の保存会との交流は順調に伸展していったが、いろんな条件が重なって、ある頃から困難になっていった。その時地元とのパイプ役をしたのが、尾林家と穰君の切っても切れない関係だった。尾林克時さんと、その近い親戚であり花太夫をしておられる清水晃さんを、個人的に頼って「花の舞」を教わったり、花祭りに参加させてもらったりした。この時一緒に動くことが出来たのが、「ダガスコ」の先生たちであった。「ダガスコ」とは、民舞の実践をしている先生たちの研究会で、東京民舞研の北多摩地域での自主練習会のような形で発足したが、自立して活動するようになってきている。

これ以降、「ダガスコ」の先生たちを中心に、5月の連休・夏休みの8月・11月の「花祭り」と現地に通うようになった。

全国農協観光協会主催の「民俗芸能と農村生活を考える会」の農協ホールでの公演（1993.1.30）で、御園の保存会が出演することになった。東京での民俗芸能の公演としては画期的な盛り上がりで、大成功だった。この東京公演の打ち上げの交流会で楽しくいっぱい飲みながらの話が、「東京花祭り」の直接のきっかけになった。

公演は大成功で好評だったが、みんな一抹の寂しさを抱いていた。学校や村の事情で、「花祭り」の一番の華である子どもたちの「花の舞」とあのしなやかな跳躍の連続の青年たちの舞が見られなかったのである。

「御園には、もうこのあと子どもはいない。東京にはいっぱいいるのにねえ。」今後、御園の「花祭り」や「花の舞」はどうなっていくのかという問題であった。この問題は、もうすでに御園小学校閉校時点のはるか以前から心配され語られていた問題である。始めて見た観客の人たちは大いに感激して帰っていったろうが、全体を知っている我々は、子どもと青年がいなくなった姿を東京の農協ホールで見てしまったのだ。

このときに、花太夫の清水晃さんが、「穰君が立派に舞う姿を見て、花祭りの舞はよその者でも伝承していけると思った。本格的に教わりたいと言うところには、喜んで協力したい。」そしてこの言葉を受けて「東京の子どもたちに教えよう」と言うことになった。

この日の公演の解説パンフレットに現地の青年代表の声として清水さんの娘さんである清水由紀さんの文章が載っている。

「過疎化が進み、祭りの継続も徐々に難しくなっていく。でも、私たちの心の拠り所である『花祭り』、次の時代に、また次の時代へと伝えていきたい。」

その場のみんなの気持ちを表す言葉であった。

飲んだ勢いも手伝って次の動きが歩み始めた。

東京の子どもたちに「花の舞」を

1993年8月の御園での講習会が終わって、夏休み明けの9月、人見・広木夫妻とダガスコの先生方が中心になってどのように東京の子どもたちに伝えていくのか、実行委員会と称して相談会を持った。

東京と言っても、ダガスコの先生方の北多摩地域が中心地とならざるを得ないし、練習に何回も通えるという事も条件だ。練習は穰君が住んでいる東久留米滝山地域で始まることになった。

とりあえず小学4年生以下の子どもを募集した。子ども集めは主に広木さんが花の舞の写真やパンフレットを持って、子どもたちに直接会って話をして廻った。ともかく近所の親しい知り合いの子どもを対象として誘ってみたが、1回も見たことのない踊りを、話だけで一緒にやろうと子どもたちを募るのはとても難しい。それでも、誘う中で子どもたちが強く関心をよせたのは、「このまま放っておいたら御園の『花の舞』は消えてなくなってしまふんだよ」という所であった。

東久留米市滝山地域は、ここ20数年の間に外から移り住んできた人が圧倒的に多い新興住宅地帯で、村や町の伝統のような文化や行事は、ほとんどなかったところだが、子を持つ親たちの「子どもたちにふるさとを」とのささやかな思いから始まった盆踊りが、今年で24回目を迎える。この盆踊りで太鼓を叩いたり踊ったりする子どもたちを中心に話しかけたが、その学校や学童保育のお友だちと一緒に19人の子どもたちが応えてくれた。子どもたちが見たこともない踊りをやると決意して、練習会に集まってくれたのには、本当にうれしかった。

5年間の取組みの概要

まず一步を踏み出そう

「奥三河の花祭りは、氏族繁栄、見る人たちが参加して成り立つ芸能です。舞い

手の体が舞の世界に全身入り込み、心身共にのって舞う、その舞に見る者も魅せられてのって舞う、その『祭り場』が、舞い手、楽、観る者、一緒に舞う者、皆一体となって、一つの世界を生み出していく、若者の舞いは一つの舞いが40～50分のものもある。時間をかけてじっくり無理なくその場を生み出していく・・・」(93年広木)

とにかくまず一步練習をはじめよう、と開かれた93年9月、広木宅での第1回「花の舞」練習会に集まったのは、4才から小学4年生までの19人の子どもたち。

「発表会ではなくて、「花祭り」を第一回目からやろうと意を決したのは三つの理由があります。子どもたちは『花祭り』の何かを受け止めたという感触。子どもたちに本場と同じように「祭り」の場で舞わせてあげたい。長い伝統のある文化は本気でやってもそう簡単に受け継げるものではない。本格的にやる気でないとな本筋からはずれて大事なものを受け継ぎそこなってしまう。この花祭り、花の舞をなくしたくない(他の地域でもやっていますから当面すぐになくなってしまいうことはないでしょうが、御園地区は小学生が3人)という思いと、この練習をはじめた素敵な子どもたちの熱意を生かしたいという思いで突っ走ってしまいました。」(広木)

こうして思い膨らむ中、子どもたちの活動を支援するため、「花の舞父母会」が結成された。練習する子どもたちの世話や現地保存会の方々の受入れ態勢、東京での花祭りの裏方の仕事などを担う。そして迎えた12月25日(土)の第1回“仮称”東京花祭り。地域の方々50余名の参加を得て、滝山小学校の図書室を借りて開催。初年度の事、子どもたちの演目は全て舞上げだったが、どの子の舞いも、ひたむきな子どもたちの熱意がほとばしる素敵な舞だった。

はじめての夏の合宿

2年目の夏には、はじめての御園合宿が計画された。保存会ははじめ御園の方々に温かく迎えていただき2泊3日の合宿は瞬く間に過ぎた。子どもたちは、現地の舞庭での舞の練習を中心に、星の観察や川遊び、現地の方々との交流会と御園の自然と人情にたっぷり触れることができた。花祭りを育んできた温かさを実感できた合宿だった。9月には第2回の花祭りへ向けて子どもたちも大人もスタートした。夏の合宿で現地への親しみも倍増すると、やはり今度はぜひ現地の花祭りに参加した

いということになり，11月には，子どもたちと共に初めて御園の花祭りへ参加した。しかも，4人の東京の子どもたちが舞わせてもらえる機会をいただいた。現地の物凄い熱気も夜中の12時すぎに舞うというのも初体験の子どもたち，しっかりと御園花祭りの伝統とパワーを体全体で受け止めてきた子どもたちだった。12月の第2回“仮称”「東京花祭り」から会場を滝山西部地域センターホールに移し，大きな舞庭をつくった。父母会では，衣装作りと共に父親たちが釜を製作した。子どもたちも22人に増え，「花の舞」も盆・湯桶・扇と幅を広げていき，幼児の舞上げには担ぎ手として父親も登場した。

母親，父親も舞う

3年目を迎えた東京での花祭り，8月の現地合宿，9月には祭りへ向けてのスタート，10月には保存会の方々を迎えての講習会，11月の御園花祭り参加，12月の東京での花祭りと，年間サイクルも定着してきた。この年の第3回東京花祭りから，母親たちの「花の舞」と「順の舞」，父親たちの「順の舞」が加わった。

4年目を迎えて子どもたちも中学生になった。そこでこの年の大きな目標は中学生の三つ舞への取り組みだ。父母会活動への父親の参加も軌道にのり，この年，“親父の会”が発足，順の舞と共に「歌ぐ羅」（唱歌）への取り組みに力を入れた。

5周年に向けて取り組む

4年目を終わると，大きな節目の5周年に向けて様々な取り組みが始まった。舞をより深めるためには花祭りについての理解を深めることが必要との思いから，子どもたちの練習の合間に少しずつレクチャー的部分を入れていくとともに，実行委員会ニュースに“花祭り一口メモ”という学習的要素を入れ，そのために学習会担当を設置して，大人も少しずつ花祭りの学習を深めていけるようにした。この年，「四つ舞」の衣装，ゆわぎ，鬼の衣装を業者に発注し作った。6月・7月には中学生だけの「三つ舞」練習会も開催，そして夏合宿，9月からの定例練習会も回を増やし，現地の方々による講習会も二度開催，熱のこもった「舞習い週間」を経て，12月，第5回東京花祭りが開催され，大きな成果を上げることができた。幼児の舞の裾野が広がったこと，四つ舞や地固め，鬼の舞など新しい舞いに取り組めたこと，中学生の三つ舞の内容も深まって若者層の充実に向けて展望が開けてきたこと

などの他，全般的に舞が充実し祭りの意義や舞の意味など学習も深まってきた。東久留米市長および小平市長よりお祝いや激励の言葉をいただくと共に，ダガスコ（北多摩民舞研），東京民舞研，民俗学研究者の方々にも多数参加していただき，助言をいただいた。この年，東京花祭りは東久留米市の地域振興文化事業として認められ，祭りの会場使用料や講師料などの経済的支援も受けることができた。地域の方々270名あまりの参加をいただいた。

「東京花祭り」5年の歩み

	1993年 第1回仮称 東京花祭り	1994年 第2回仮称 東京花祭り	1995年 第3回 東京花祭り	1996年 第4回 東京花祭り	1997年 第5回 東京花祭り
子供の舞手 大人の舞手	19名 9名	24名 12名	24名 15名	23名 20名	23名 21名
地域の方々の 参加者数	36名	110名	156名	190名	277名
保存会の方々の 人数	3名	4名	7名	6名	13名
日時 時間	12月25日 (土) 2:30～5:30 3時間	12月10日 (土) 1:30～4:30 3時間	12月9日 (土) 1:00～5:30 4時間30分	12月14日 (土) 1:00～5:30 4時間30分	12月13日 (土) 1:00～6:00 5時間
子供の演目	花の舞 舞上げ	花の舞 舞上げ 盆 湯桶	花の舞 舞上げ 扇・盆 湯桶	花の舞 舞上げ 扇・盆 湯桶 三つ舞・扇	花の舞 舞上げ 扇・盆 湯桶 三つ舞・扇
大人の演目	花の舞 舞上げ 順の舞	花の舞 舞上げ 順の舞	花の舞 舞上げ 扇 順の舞 地固め	花の舞 舞上げ 扇 順の舞 四つ舞	舞上げ 順の舞 地固め 四つ舞 朝鬼の舞
保存会の演目	はちの舞 地固め 鬼の舞	三つ舞 鬼の舞	一の舞 鬼の舞 三つ舞・棒塚	鬼の舞 三つ舞・棒塚 みそ・しゃもじ	お湯だて はちの舞 山見鬼の舞 三つ舞・棒塚 湯ばやし

花祭りの地元での祭の伝承

私たちは御園から指導を受けながら東京で花祭りを伝承しようとしているのだが，それでは地元御園ではどのように祭を伝承しているのだろうか。

魂の鍛練の場

花祭りは奥三河地方に伝わる祭であり地域ごとに祭の形態が少しずつ異なるが、子どもの関わりについて基本的なところを調べてみると概ね次のようになっている。5, 6 才ごろから祭に参加し、小学生で花の舞を舞い、中学生から高校生にかけて三つ舞を舞い、20 才頃から四つ舞を舞う。この後おとなの舞に入っていく。このように年齢に応じてそれぞれの舞を勤めるという制度になっている。子どもの成長という観点では、舞をとおして未熟な魂が年々鍛えられ成長する、この魂の鍛練の場として花祭りがあったとも考えられている。したがって、子どもであっても舞一つが数十分にもおよんでいる。

御園における子ども、青年の舞の種類

舞		所要時間	対象	
花の舞	舞上げ	約 15 分	5, 6 才	幼児, 学童
	盆	約 20 分	小学生低学年	
	湯桶	約 20 分	小学生中学年	
	扇の手	約 30 分	小学生高学年	
三つ舞	扇の手	約 40 分	中学生から高校生	少年
	棒塚	約 60 分		
	剣	約 60 分		
地固め	扇の手	約 40 分	中学生から	少年, 青年
	棒塚	約 40 分		
	剣	約 40 分		
湯ばやし		約 90 分	18 才前後から	青年
四つ舞	扇の手	約 60 分	20 才前後から	青年
	棒塚	約 90 分		
	剣	約 90 分		

御園での祭りの伝承

人々が祭で舞う舞は祭りの約 1 週間前に決まる。それから「舞習い」が始まる。「舞習い」は地域のおもだった人々（花太夫をはじめとする指導的な立場の人たち）と舞を習う子どもたちが一堂に集まり、夜中までおこなわれる。花太夫の家と、昔村役場が置かれていたという建物とを 1 日交代で使いながら「舞習い」はおこなわれている。「舞習い」の子どもたちは夕食後 7 時頃から集まり、少年、青年の「舞習い」が終わるのが夜中の 12 時を過ぎ、時には 1 時頃までおこなわれた。これを 1 週間続ける。指導に当たる大人たちは地域を代表して子どもの舞の面倒をみることになり、太鼓を打ち、笛を吹き、歌を歌いながら、そして酒を酌み交わしながら每晚厳しい

指導を繰り返す。「ひざを柔らかく」、「腕をもっと上げて」、「元気をだして」など何度も繰り返し声をかけながら子どもたちの舞の力量を高める。いまでは過疎が進んで舞手が不足しているのに、舞たいと願う子は誰でも舞えるようになってきているが、まだ地域が活発だったころは本番では選ばれた子どもだけしか舞うことができず、舞の練習に参加する子どもも真剣そのものだったそうだ。指導してくれる大人たちに対する信頼は絶大なものがある。この地域では「花祭り」とおして世代間の信頼関係、年配者に対する尊敬の心が培われているような気がする。「花祭り」には世襲制で引き継がれている役がある。花太夫、山見鬼、榊鬼などであるが、これらは直接親から子へ家ごとに伝えられている。

祭の準備は各戸から一人ずつ出て、祭り当日の朝からおこなわれる。舞庭の準備、舞道具の準備など祭りが始まる夕方までに終わらなければならない。舞庭の飾り付けは年配の人から若者に実地で伝えられていくが、準備が大変な労力を必要とするため御園では他地区よりも全体的に簡素化されてきているらしい。

子どもたちの成長を祝う

祭本番では、子どもたちはいつもなら寝ている真夜中に舞わなければならない。観客の囃子の中、酒に酔った観客をすぐ目の前にして舞うという体験を小さいときから味わい、祭の雰囲気を感じている。自分たちの舞を見る大人たちの嬉しそうな顔を見て、自分たちが大事にされているという実感をもち信頼関係がここでも築かれている。

このように、「花祭り」は子どものたくましい成長を願いそして祝うという面も大きい。地域の人々によって子どもたちは大事に育てられているのである。

子どもたちと花の舞 教えてきたダガスコの立場で

4 才から小学 4 年生までの子が 19 人も

9 月に入り、涼しい秋風が吹き始めた頃、一回目の舞習いが始まった。夕方、人見・広木夫妻が提供してくれた稽古場で、舞いの指導を担当する事になった私たちダガスコはどんな子が集まってくるのだろうと楽しみに待っていると、4 才から上

は小学4年生までの可愛い子が19人も集まってきた。広木宅は彼等に見れば、もう勝手知ったる他人の我家という感じで、追いかけてっこをして走り回ったり、組み合ったりとなかなかの賑いだ。

教えることはやはり大変だ

私たちダガスコが現地御園の保存会の方から何年もかけて教わった「花の舞」も、始めの頃は、私たちは相当な戸惑いと混乱の中で文字通り四苦八苦していた。御園では、花祭り直前の1週間前から「舞習い」という練習期間に入るが、地元の方々はそれこそ赤ちゃんの頃からお囃子を耳で聴き、歩き出すと見よう見真似で舞い始めると言う。「こうやって、次はすくみだよ」と言われれば、すぐ形が決まるが、ダガスコの私たちときたらまったくの白紙状態。刷り込みも予備知識も全くない。指導される保存会の先生方は相当骨が折れたことだろう。私たちが東京の子どもたちに教える段になって、教えることの難しさを実感した。

練習は、輪になって、ズンドンドコ、ズンドンドコのリズムに合わせて四方立てから入った。教室中ではなく、子どもたちにとって、ここは遊びの世界だ。疲れたといったら、すぐ床に座り込んでしまう子、寝転がってしまう子ともうのびのびのし放題。時には「やだ」と言って、せっかく持たせた錫杖と扇を放り出す子もいる。子どもに見れば、当初の私たちがそうであったように、まだ見たことも聞いたこともない舞だ。ダガスコの先生方が舞ってみせたところで、すぐに花祭りの世界には入れるものではありません。私たちは学校でしているような教師的な態度ではいけないと知りつつも、なかなか子どもたちとの接点があかぬ心をつめた。御園での舞い習いのように、それこそマンツーマンで腕を持ってあげたり、やさしく肩に手をかけて方向を示してあげたり、一緒に舞いながら練習を進めた。それでも、一踊りすると別室へダッシュと駆けて行って遊び始めてしまう。それをなだめすかしてまた稽古場に連れ戻し、練習の続きを始めるといった状態が続いた。指導するダガスコの私たちは、昼も学校で子どもたちの指導に走り回り、夕方帰ってからもまた仕事を続けているといった状態になるので、へとへとに疲れてしまう時もあった。しかし練習が進むにつれ、子どもたちも練習のペースがあかぬようになり、少しずつ集中できるようになってきた。そのうちにその子らしい表現も見られるようになってきて、私たちの疲れも心地の良いものになってきた。「上手、上手」

とみんなにほめ言葉をかけてもらいながら、何とか練習のペースもできてきた。練習が少し進んだところで、実行委員会・ダガスコ共催で保存会の方から直接舞を習う講習会をもった。地元の方々の花祭りのエキスのたっぷりしみこんだ舞いを手本にして、土曜日の午後から夜にかけての練習だけだったが、子どもたちの舞いはグンと確かなものに変貌した。本物の花の舞いに触れて、子どもたちなりに納得の行くものがあったのだろう。

またその年の御園の花祭りを見に行った4年生の男の子がいたが、帰ってきてからのその子の舞いに対する気持ちの向け方が、真剣なものになってきて、舞いも回りで見ている方々がびっくりするほど上手になった。

学校の中の子どもたちとは違う面が見える

スタートの頃は、どうなるのかはらはらのしどうだった私たちだったが一山も二山も越えるごとに花祭りの世界に近づいていく子どもたちの変化に驚き、学校の中で見る子どもたちとはまた別の姿を見る思いだった。でも、これが成長していく本来の子どもたちの姿なのだろう。こういうこともあった。いつも乱暴な口をきいては反抗して、なかなか踊りには入れなかったA君。リズムにのったかなと思うと踊っている友だちをつついたりからかったりしてすぐふざけてしまう。練習の後の反省会では、いつも名前が上がっていたそのA君が、練習にはいつも一番に稽古場に来ていたということがわかったのだ。それを聞いて、私たちの胸には熱いものがこみ上げてきた。

希望を感じさせる感動がいっぱい

そうして迎えた第一回東京花祭り。子どもたちの舞いはどのグループも舞上げばかりだったが、お母さんやおばあちゃん手作りの衣装を着て、はつらつと力いっぱい舞った。見守る人たちの心は、その踊る姿を見てすがすがしく心が洗われるような、希望を感じさせるような感動でいっぱいになった。指導してきた私たちはそれを感じ、「ああ、これぞ花祭りの原点」と何回もうなずき合った。

東京花祭りが二年目、三年目と進むにつれ、子どもたちの舞いもその成長に合わせたものに取り組んでいった。花祭りの舞いは、実に良くできているなあと感じてしまうのだが、入門の舞上げがしっかりと舞えるようになると、その上の舞いも

それほど無理なく進めるのだ。そして、「来年はあの舞いを自分が舞うんだ」と、手本を見て、下の子は心の準備もするようになるので、「舞習い」も充実してきた。御園の花祭りでは舞上げを舞う子どもたちがいなくなってしまったので、東京の子どもたちが舞わせてもらって地元の方々にも大変喜んでいただいた。

三つ舞の指導は地元出身の青年らが引き受けてくれた

スタート時は一番最年長であった4年生も、今年の中3になった。中学生になると勉強や部活で多忙な中学生。花祭りの練習に参加することも困難になってきたが、舞上げから、盆、湯桶、扇の手と子どもの舞いである花の舞いを先頭きって舞ってきた子どもたちが、いよいよ若者の舞い「三つ舞」に挑戦している。この「三つ舞」の指導は、御園で指導を受けた穰君、東京の大学に通う御園出身の尾林暁史さんがこころよく引き受けてくれた。

もうすぐ今年も、第6回目の東京花祭りに向けての舞習いが始まるが、すっかり子どもたち同士は仲良しになり、学年を越えて仲が良く、連れだって遊ぶ姿が良く見られるそうだ。この東京で、花祭りを作り上げていくことの意義はこういうところにもあるのだとしみじみ思う。

子どもたちと花の舞 親の立場で

秋風が吹くと ...

秋風が吹き始めると、いよいよ花祭りの季節の到来である。この季節を待ちこがれているのは、むしろ子どもたちではないか。6年目を迎える今年は、そんな気がしてならない。

この会が発足した6年前、一番大きかった沙織ちゃんは今年中学3年生になった。舞うこと、踊ることが大好きという沙織ちゃんは子どもたちのリーダーである。とともに、子どもから大人までその成長に合わせて変わっていく「花の舞」の新しい舞を覚えてくれる継承者第一号でもある。「今年は受験があるので夏合宿には行けませんけど、12月のお祭りはやります。」先日もそんな電話をかけてきてくれた。

発足当初、最年少の悠ちゃんは当時4才。二人のお兄ちゃんと一緒に「花の舞」を楽しむこと5年。身体に花の舞のリズムがすっかりなじんできた。

毎年、多少の入れ替わりはあるが20名程の子どもたちが「花の舞」を楽しみに集まってくる。秋風が吹く9月は12月の祭にむけて練習開始の時期。今年はだれと舞うのかな、今年は次の舞を覚えたいなと思いをふくらませて。

メンバーは、ほとんどが同じ地域に住む友だち同士。学校でも部活でも地区子ども会でも顔を合わせることの多い友だち同志なのだが、「花の舞」の広木先生のお宅に集まる集まりは格別の楽しみのようだ。久しぶりに顔を合わせた第一日目のにぎやかなことにぎやかなこと。

ズーンドンドコ ズーンドンドコ... 人見先生の太鼓が鳴り出すと子どもたちの身体が自然と動き出す。昨年初めて舞った子も一年ぶりのリズムを身体はすっかり覚えていた。こうして東京花祭りの子どもの「花の舞」の練習が始まる。

ほめてくれてありがとう

1966年8月の夏合宿の時の寄せ書きを見ていたら、徹君の「ほめてくれてありがとう」という言葉が目にとまった。この一言に東京花祭りの子どもの思いと父母の思いが凝縮されているように思う。

年に二回、夏合宿と秋の講習会に私たちは現地（御園）の保存会の方から指導を受ける機会がある。保存会の指導は決して甘いものではなく舞に対する思いは深く厳しい。その風土が産み出してくるものなのか、東京の子どものひざはとても堅く動きがぎこちない。何度も何度も厳しい指導を受けながらも保存会の方から、その懐に抱かれたような優しい温かい思いを与えてもらえるのはどうしてなのだろう。合宿を終えて帰るバスの中の徹君の脳裏によみがえった言葉は「ほめてくれてありがとう」だったのだ。

「花祭りには子育ての原点がある」。東京花祭りの父母の仲間たちと話していたらそんな言葉が飛び出してきた。村の年長者が次の世代の人々（子どもたち）へ花の舞を伝承していく。その伝承という行為の中で人々（子どもたち）は、共同体としての村の宝として育てられ、大事にされてきたにちがいない。年寄たちは、今の保存会の方のように厳しい指導と温かい励ましをしながら、成長の明かしとして次の舞を教えたのであろう。600～700年という伝統文化を簡単に想像することはできないが、花祭りの伝承は今、私たちの目の前の子育てと切離して考えることはできなかった。

子どもたちは、ほめられた動作を自信を持って舞う。ほめられたことで身体の緊張がほぐれ伸び伸びと舞い始める。一番小さい子たちの「舞上げ」という舞は15分程の舞になる。昨年はじめて舞った4才の麻苗梨ちゃん。「腕が上がってきれいだねえ」とほめられるとますます腕を上げて手を伸ばす。「拍子にのっていいぞ」と言われれば一層身体をはずませた。回りの大人たちに励まされて15分の舞を生き生きと舞い終えたのだ。

一人でも行く

夏合宿の参加者の集約をしていた。今年は中学生が部活と重なったり、受験を控えての夏期講習と重なったりで参加者が少ない。どうやら中学生の男子は一名だけ。そんな状況を知らせておこうと涼君と話をしてみた。「えっ一人?! 聡君は?! 圭介君は?!」と友だちの状況を問われたのでそれぞれの事情を話すと、「そうですか。でもぼく一人でも行きます」と力強い返事が返ってきた。

涼君も発足当初からの参加で今年6年目。中2の男の子だ。三つ舞の棒塚の練習を始めている。いつか御園の花祭りを見に行き行って初めて三つ舞を見た時、涼君のお母さんが「涼も三つ舞まで続けてくれたらいいなあ。涼の棒塚を見たい!」と話してくれた。現地の花祭りの継承は男の子なのだが、東京では男の子になかなか舞いが広まらない。涼君のお母さんも決して舞うことを強要することはしなかったが青年の舞まで続けてくれたらという思いは抱いていただろう。

「一人でも行く」という涼君も現地御園の空気に触れ、保存会の人たちとのつながりの中で「花の舞」を通して何かをつかみ始めているのではないだろうか。

仲間がいるから

昨年6才の柊くんが入会してきた。「征君もいっしょだよ。征君とおどるんだからね」と。柊くんのお兄ちゃんお姉ちゃんがずっと舞っているので前から見にきていたのだがなかなかやると言わない柊くんだった。ところが大の仲よしの征君といっしょに練習をして祭の日も二人そろってデビューした。

中2の綾ちゃんも今年6年目。「最初は練習がいやでいやでたまらなかったけど最近自分から進んでいくようになったよ」と話してくれた。「6年間やってこれたのは仲間たちがいたから。みんなで練習していたら私だけちがうことがあったりす

るとそれを私ができるまで待っていてくれたり教えてくれたり...。三人とか四人とかでやるから楽しいんだよ」と。

5年を経て、東京花祭りの子もたちは仲間といっしょに舞うことの楽しさを感じ始めてきた。また次の舞に憧れ、自分も挑戦していきたいという気持ちを抱いている。さらに、大きい子どもたちが小さい子どもたちに「もう少し手をあげるといいよ」とか、「テホへがうまいねえ」などと声をかけ始めてきた。教えてもらう側から自分が教えてもらったことを小さい子へ伝承していく。そんな関係が生まれる日もそう遠くないのではないだろうか。

みんなで祭を作ろう

東京花祭り父母会は子どもたちの活動を援助する後押しの会として発足した。母親たちは、毎回おやつを用意し練習を終えた子どもたちに楽しみを作った。父親たちは、主に祭の日の会場作りを担当した。二年目には会場に設置する大きな釜を作った。三年目にはその釜から湯気を出そうと工夫をこらした。次第に子どもたちの練習を見ているうちに母親たちも父親たちもステップを踏み始め、今では舞うことも楽しくなってきた。

その父母会や舞を教えてくださいとダガスコの先生方や人見先生広木先生とともに祭の担い手として子どもたちも活躍し始めた。

小学生、中学生は放課後、「東京花祭りへのおさそい」のピラを地域に配る。大きい子と小さい子がいっしょのグループを作って配ったり、自分の家の近所の分を受け持ったりする。会場にかざるざげち（切り絵）も子どもの手で作る家庭もでてきた。昨年は練習の後の時間を使って中学生が小さい子たちが頭にかぶる花がさの修理をしてくれた。

伝統ある芸能を東京の子どもたちが伝承する意味は何なのか、なぜ花祭りなのかなど長い時間をかけて考えていくべき課題はたくさん残されている。しかし今ここに、魅力のある芸能に触れた子どもたちが舞うことを楽しみにして、自分たちの祭りを作ろうと小さい力を合わせてきているのである。

「東京花祭り」の夢

奥三河地方に 700 年の昔から伝わる「花祭り」を東京で始めてから 5 年が過ぎた。子どもたち、「花しょうぶ」、ダガスコ、花の舞父母会など、総勢 50 名ほどの組織となった。子どもたちの結びつきも強くなった。大人たちも練習の後、話し合いの後など事ある毎に一杯飲む機会が増えた。「東京花祭り」にかかわっている大人たちが集まって「夢」について語る機会があった。

子どもが帰ってきた時いつでも踊れる場にしたい

「花の舞」には子どもを引き付ける何かがある。4 人で舞うことで、子どもたちはお互いを確認しながら動ける、周りで見ている大人も子どもたち一人一人がよく見える、子どもたちはそれを意識しながら舞う。子どもたちの喜びを大事に育てていきたい。中高生になると、親や周りの大人に反発して祭りから離れることもあるが、これは自然な成長過程だ。またいつか戻ってくる。そして踊る気になった時はいつでも踊れる場にしたい。子どもにふるさとを、いつでも帰れる場をつくりたい。

都会で祭りや民俗芸能を育てていく意義

都会は、地域の間人間関係が希薄だといわれている。地方から出てきた人が多く、共有する文化が少ない。ふるさとの祭りで育った大人たちが、子どもの時に「祭り」に取り組む中で培われた「祭りを自分たちで作りに上げていくこと」、地域の大人たちとの関係、そして子ども同士の関係が大切なものと認め、自分のふるさとにあったような地域の文化を子どもたちに体験させてあげたいと感じているのではないか。そこで地域で共有できる祭りや芸能を育てることがすごく大事になっている。だから都会のあちこちにこのような祭りや民俗芸能があって欲しい。「東京花祭り」はその一つだ。子どもから大人まで各人の様子がよく理解し合えるほどの地域の大きさが重要で、花祭りの地域の規模はなかなかいいところにあるのではないか。生活している子どもたちがよく見える、そういう規模なのである。

生きる力を養う場に

「花祭り」は、もともとは太陽信仰から始まった。昔の人々は生きていくために

自然と共存する必要があった。現代は、自然破壊などに対する反省の上に立って、自然と積極的に共存することを追求するようになってきつつある。「花祭り」は生活に密着していたのであり、「東京花祭り」も地域の環境、生活と積極的にかかわる必要を感じる。「花祭り」には地域の人々が子どもたちのたくましい成長を祝うという面があるが、「花祭り」の伝承が子どもたち、そして青年の総合的な教育の場になればいい。花祭りは子どもから老人まで「舞う」ことでかかわれる特徴のある祭りだ。小学2、3年の子が、老人の話を真剣に聞いている姿がここにはある。教育の目的は人間としての生きる力を培うこと、「計画性をもった行動」「協力し分かち合う」能力を培うことだといわれている。花祭りの伝承の場がこの役割を果たせるようになっていけたらいい。

地域に根づいて夜通し舞えたら

「東京花祭り」で若者がわんさと集まって、現地のように腕を組んでテーホヘテホへと周りで踊るようになれば素晴らしい。今、子どもたちの荒れた状態をすべて学校の責任にする傾向があるが、親や地域の教育力が求められている。花祭りが地域の子どもたち、青年たちの憩いの場となり、老人から子どもまでかかわる地域の教育の場となれたらいい。それが学校とうまく役割分担をしていき、学校も地域の活動に理解を示し、共に手を携えていけるようになっていけたらいい。さらに地域に深く根づいて、花祭り本来の「夜通し舞いつづける」ということが、商店街、集合住宅の真ん中でやれるようになったら最高だ。

東京花祭り年表 (1985 - 1997)

1985. 1 1986. 6 1989. 5 ~ 1990. 3 1990. 5	<ul style="list-style-type: none"> ・民舞研が東栄町御園の花祭りを見学, 保存会との交流も始まる ・民舞研, 現地保存会より「花の舞」を習う ・広木稯君(小学3年生)が閉校の年の御園小学校へ山村留学をする ・ダガスコ, 保存会の方との交流が始まり, 指導を受け始める
1993. 1 1993. 7~ 8 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> ・東京花祭りのきっかけとなった御園保存会の東京公演「民俗芸能と農村生活を考える会」(農協ホールにて) ・東京滝山地域で子どもの参加者募集 ・東京花祭り第1回実行委員会 ・東京の子ども達の「花の舞」の練習が始まる ・御園の保存会の方より講習を受ける ・「花の舞」父母会結成 ・第1回仮称「東京花祭り」(滝山小学校図書室)
1994. 8 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> ・御園合宿 ・練習が始まる ・講習会(東京) ・御園の花祭りを見学し, 4人の子どもが舞わせていただく ・父母会 衣装作り 釜作り ・第2回仮称「東京花祭り」(西部地域センターホール)
1995. 8 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> ・御園合宿(御園山荘をお借りし, 37名参加) ・練習が始まる ・講習会(東京) ・御園花祭り見学バスツアー (マイクロバスを借り, 25名参加) ・第3回「東京花祭り」(西部地域センターホール)
1996. 8 9 10 11 12	<ul style="list-style-type: none"> ・御園合宿(マイクロバスを借り, 26名参加) ・練習が始まる ・親父の会発足 ・講習会(東京) ・御園花祭り見学 ・第4回「東京花祭り」(西部地域センターホール)
1997. 2 5 6 8 9 11 12	<ul style="list-style-type: none"> ・学習係より花祭り一口メモの発行(鬼について) ・親父の会, ダガスコとともに御園にて講習を受ける ・中学生の三つ舞の練習が始まる ・御園合宿 ・練習が始まる ・御園花祭り見学 ・講習会(東京) ・「四つ舞」の衣装, 鬼の衣装, 「ゆわぎ」を業者に発注, 製作 ・第5回東京花祭り(西部地域センターホール)



御園の花祭りで花の舞「舞上げ」を舞う東京の幼児，小学生



花の舞「舞上げ」で父親の肩に担がれて出てくる幼児，小学生



花の舞「扇の手」を舞う小学生



「三つ舞」を舞う中学生



インターネットで「東京花祭り」を紹介